

本校ラジオ部の活動を通して

～主体的に自己の力を発揮できる場づくり～

大阪府立大阪北視覚支援学校 寄宿舍指導員 高橋 昇 他

1 はじめに

本校は、幼稚部から高等部専攻科まで計 62 名（令和 4 年 4 月 1 日現在）在籍しており、その中で寄宿舍を利用している生徒は高等部普通科 7 名、高等部専攻科 2 名の計 9 名である。

創立 122 周年の本校では、寄宿舍の利用は 70 名を超える時代もあったが、近年の入学者数の減少、寄宿舍の利用対象者の制限などもあり、現在に至っている。しかし舎生数は少ないが、障がいの多様化により視覚以外の障がいを併せ持つ舎生も増加しており、寄宿舍での生活指導も個々に合った対応や指導が求められ、より細やかな支援を行なっている。

週 4 泊を寄宿舍で生活する中で、日々寄宿舍での自治活動やクラブ活動、また余暇時間など毎日忙しく生活はしているが、反面同じリズムの生活を淡々と過ごしているのではないかと感じ、なにか新しい取り組みができないか考えた。

今夏、筑波大学視覚支援学校の「ラジオ部」実践報告で舎生が中心となって取り組んでいる様子を聞き、本校でもできる形で取り組めないかと考えラジオ部の設立を行った。

この活動を通して、舎生が力を合わせて取り組むことで、舎生自身が寄宿舍生活をより楽しむことができ、新しい自分を発見するきっかけになってほしいと考える。

2 目的

ラジオ部を創設し新しい取り組みを行うことで、寄宿舍生活をより充実したものにし、達成感を持たせ新たな自分を発見する。

3 取り組みの計画

9 月 立ち上げ ⇒ 10 月 企画・収録・編集 ⇒ 11 月 放送予定

4 具体的内容

9 月 7 日(水) 舎友会にてラジオ部発足の案内

9 月 14 日(水) 第 1 回 打ち合わせ

ラジオを作るには DJ・編集プロデューサー・取材担当・音楽担当などの役割があることを伝え、次回チーム V6（普通科舎生集団の名称）招集時に役割分担と企画を決めることを確認する。

9 月 26 日(月) 第 2 回 打ち合わせ①

役割分担（参加者 3 名舎生 A、舎生 B、舎生 C）

取材チーム（舎生 A・舎生 C）合いの手担当（舎生 B）

CM 担当（舎生 A、舎生 C）

オープニングはチーム V6 にちなんで V6 の「愛なんだ」がいいなど、意見も出る。

9 月 28 日(水) 第 2 回 打ち合わせ②

役割分担（参加者 舎生D、舎生E、舎生C）
メインパーソナリティー(舎生D) ピアノ演奏(舎生E)
舎生Fについては編集プロデューサーを個別に依頼し承諾を得る。

企画内容については、それぞれがしたいことを出し合い以下の企画に決定した。

お悩み相談室

やってみたいことを話す

未来予想図（夢）を話す

ピアノ演奏はエンディングと舎生Dとセッション

毎回ゲスト（先生）を呼んで話を聞く

オープニングは「オールナイトニッポン」のテーマソング

エンディングはSUMIKAの「SHAKE」

次週から収録開始であること、完成したものは文化祭で放送することを伝える。

10月4日（火）第3回 音源収録

10月5日（水）第4回 インタビュー収録

「今日の晩御飯はなんですか？」と退勤時の先生にインタビューをおこなう。（合計で7名の先生に協力していただくことができた。）

10月18日（火）第5回活動 音源編集

10月19日（水）第6回活動 音源収録

主にメインパーソナリティーの声を収録、

その他の日にもCM音源収録、合いの手収録などを個別におこなう。

10月下旬～ 職員による編集作業

11月1日（火）完成披露

11月5日（土）文化祭展示コーナーにて放送

5 結果と考察

筑波大学付属支援学校寄宿舍の実践報告会からラジオ部の活動に取り組んでいることを知ることがあった。そのラジオ部は、日々どんな体験や経験をしたかを大事にし、将来の進路を考える上でもこの活動が何らかのきっかけになるかもしれないという思いで取り組んでいた。15名の部員で活動しており、舎内でのラジオ番組やインタビュー番組、YouTube ライブなどの制作を9番組行っていた。また寄宿舍の紹介動画や筑波視覚の教育活動の動画、ナレーションなどもあり多岐にわたりやりがいを持って活動しているとの報告であった。そして本校の寄宿舍でも舎生の何らかの「きっかけ」にならないかという思いからラジオ部を発足することになった。

本来のラジオは限られた時間の中で、DJが進行し、曲が流れたり、コーナーを進めたりする。しかし、本校寄宿舍の舎生が活動するにあたり、今回はすべてコマ撮りで収録を進め、編集時にすべてが合わさるように進めた。そうすることで重複舎生も参加することが可能になると考えた。

発足当初は、企画に消極的だった舎生も、第2回での打ち合わせ時の役割分担で役割をお願いすると快く受け入れてくれる様子があった。

舎生Fについては、ラジオ部発足にあたり、メンバー募集をした際「チームV6 みんなでやったらいいやん！」と積極的な様子があり、この活動に積極的に参加できるのではないかと期待していたが、自分は何をするのかイメージがすぐに持てなかったこともあり、第2回の打ち合わせに参加することができなかった。彼は普段から、新しいことにすぐに取り組むことが難しいため、これまでも行事や取り組みに参加できないことがあった。1回目に「V6 でやったらいいやん」が奇跡の言葉であった。しかし、ラジオ部で活動したいという思いは強かったようで、自宅で、ラジオの挿入歌に合うCDを探していたり、「おれがいないとあかんから」と言って宿泊日の変更（リハビリ等の予定を変更したい）まで母に話をしていたり、とのことであった。その意識がオープニングの声の強さにも表れているように感じた。

舎生B、舎生Cについては、普段していることや、得意なことをコーナー化して内容に取り入れ、収録についても一斉にするのではなく一人ひとりのできるタイミングで実施した。彼らがやる気をだしてスムーズに録音できるよう登校前や夕食後など、それぞれの時間でおこなうことでできるようにしたことで、それぞれの声を録音することができた。

舎生Aについては、インタビューのテーマ「今日の晩御飯は何ですか？」のみを伝え、収録時は自分の言葉でインタビューできるようにした。すると、先生方からの返事に対してその返事に合った言葉のキャッチボールを行うことができた。ある先生が、「最近太ってきたので・・・」という『食べないんですか？』、また、「今日のメニューは分からない」という『また教えてください』とつたえるなど、場面に合った言葉を使ってとてもスムーズなインタビューを行うことができ、彼の語彙力の多さに驚き、成長を感じる機会となった。

舎生Eについては、得意としているピアノを全面的に弾くことで、自身の役割に自信を持って担い、取り組むことができた。

舎生Dははじめ、ラジオ部発足を聞いたときに「楽しそうやけど忙しくて時間がないかも」と活動に消極的な様子が伺えた。現場実習、文化祭準備（学部、寄宿舍太鼓）という忙しい時期であるということを理解していたからであると考えられる。しかし、無理のない範囲でやろうと話をし、空いた時間を使ってコマ撮りでメインパーソナリティの収録を行った。

このように少しの隙間時間にでも声を収録できるように工夫したことで、全員の声を収録することができた。

出来上がったCDをみんなで集まり試聴したときは、自分たちの声が聞こえると「わー」と歓声があがり、終始聞き入る様子があった。終わった後には「もう1回ききたい」などのリクエストがあったり、朝食時の朝の放送に流したいという声もあり、しばらくの間、みんなで聞く機会を持った。

文化祭の当日は展示コーナーにCDデッキを置き、保護者にも聞いてもらう機会を作った。舎生の保護者からも反響があり、「また作成してほしい」などの意見をいただくことができた。

普段寄宿舍で過ごしている日課以外の企画を約2か月にわたり進める中で、舎生の方から「今日はなにをするの？」や「チームV6 集合や〜」など、ラジオ部の事を話題にすることも多くなり、ラジオについて興味をもたせることができた。そして、それは寄宿舍での生活に新たな刺激となっていたのではないかと考える。

6 今後の課題と方向性

理療科の舎生も朝の食事時に流してほしい、次回は自分がインタビューを受けたい等と話してくれており、舎生もうれしそうな様子をしている。

舎友会での2学期を振り返る会では、ラジオ部が楽しかったこと、ラジオ部のインタビューで色々な先生の話聞いたことなどが話題に出ていた。舎生の楽しかった出来事として深く刻まれた活動であり、一人ひとりがこの活動を通して成長することができたのではないかと考える。

寄宿舍は通学困難な児童生徒が安心安全に生活する場として存在する。その中で、日々生活を送るだけでなく、季節に応じた行事やクラブ、委員会活動を通して成長することのできる場でもある。

寄宿舍でもコロナ禍で様々な制限があり、以前のような距離感での生活が難しい中、今回の活動ができたのは、舎生がやりたいという思いがあったからである。

今後も寄宿舍を利用している舎生が安心・安全に生活できる場を保障するとともに、一人ひとりが主体的となって生活できる場として様々な活動を提案し今後もサポートしていきたい。